

令和8年度 第48回少年の主張東毛地区大会

令和8年度第48回少年の主張東毛地区大会が、8月22日（土）ぐんま未来大学ホールPAL（笠懸野文化ホール）にて開催されました。

この大会は、中学生が日頃の生活を通して感じていることや考えていることを自分の言葉で発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対する県民の理解や認識を深め、青少年の健全な成長を願って毎年開催されています。

各市町から推薦された中学生19名は、それぞれの主張を力強く堂々と発表してくれました。

最優秀賞に選ばれた3名（1名辞退）は9月19日（土）に群馬県公社総合ビルで開催される県大会の出場者として推薦されます。

県大会出場者3名の主張を発表順に掲載します。

生きているということ

館林市立第四中学校 3年 西條 志歩

みなさんは身の回りの人を大切にできていますか。そばにいて当たり前、そう思っていないですか。以前までの私は、身の回りの人の大切さなんて考えたことすらありませんでした。そんな考えが変わったのは1年前のことです。

1年前の夏、私の父はこの世から旅立ちました。頭が真っ白になって何も手につかなくなり、生きた心地がしませんでした。「もう二度と会いたくない。」私が最後に父に放った言葉です。このときの私はこれが最後になるなんて、思ってもいませんでした。この経験から、家族や友達がそばにいたことがどれだけ幸せか、本当は当たり前ではないということに気づきました。

そこで私が主張したいのは、「生きているということ」がどれだけ大きなことなのかということ です。

学校で生活していると、友達に軽々しく「死ね。」や「消えろ。」という言葉を使っているのが聞こえてきます。もちろん、本気でそう思っているとは思っていません。けれど、そういった言葉を聞くと心がずきんとします。私も弟と喧嘩したとき、口任せに同じような言葉を使ってしまったことがあります。その時、母はものすごい剣幕で私を叱りました。「兄弟だから、家族だから、友達だからと言って何でもいっていいわけじゃない」、「人が死ぬということを簡単に言うてはいけない」と。

今、生きているということ。それはまぎれもなく大切な人の存在があるからです。

父が亡くなったとき、私達家族だけでなく、家族以外のたくさんの人が泣いていまし

た。たくさんの人がお線香をあげにきてくれました。私の友達、友達の家族、学校の先生、父と面識がない人も、時間を作って来てくれました。なぜなのかわからなくて母に聞くと、「もちろん亡くなった人にお線香をあげにきたのもそうだけど、大切な人を失った人を励ましに行くのも生きている人の役目なんだよ。」と教えてくれました。それを聞いて、私のために友達や先生が来てくれたんだと思うとほっとして、少し元気が出ました。そうやって支え合って生きていくんだなと分かりました。辛いこと、悲しいことを分かち合って、生きて、どんどん強い人間になるんだなと知りました。

人が死ぬということは、その人がこの世からいなくなってしまうということです。だからこそ、簡単に相手に言ってはならない言葉だと私は思います。人間は生きている限り、必ずいつかは死んでしまいます。そのタイミングは誰にもわかりません。だから、今生きているこの時間は無限ではないということを忘れないようにしたいです。

私の話を聞いて、重い内容だなと思った人もいるかもしれません。しかし、誰もが必ず経験することです。心にぽっかり穴があいて、何もかもがどうしてもよくなる気持ちになると思います。けれど、周りの人たちの支えを借りて、その穴を埋めていかなければいけません。そして、支えてもらうぶん、自分自身も日常生活での言葉遣いや態度、感謝を忘れないことなど、できることはたくさんあると思います。照れくさくても言葉にしなければ、いいことも、悪いことも、伝わりません。私自身、頑固で喧嘩をしたときなど謝るのが苦手です。しかし、この経験を通して悪いことをしたら素直に謝る、言い方に気をつけるなど、変わった部分がたくさんあります。人は一人では生きられないからこそ、相手を大切に、思いやる気持ちを忘れずに生きていきたいです。

最後に父へ。「人は助け合って寿命を延ばしている」とよく言っていましたね。あなたの命の火が消えたとき、ようやくこの言葉の意味を知りました。人の温もり、命の尊さ、辛いことがあっても前を向く強さ。たくさんのことを教えてくれて、ありがとう。これからはあなたの言葉や思い出を胸に、真っ当に生きていきます。幸せになると、約束します。

札がつなぐもの

桐生市立桜木中学校 3年 中里 まい

「鶴舞う形の群馬県」「桐生は日本のはたどころ」群馬に住んでいる人なら誰でも一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。私が上毛カルタと出会ったのは小学校1年生のときです。周りには年上の人たちがたくさんいてみんな動きも速く、声も大きく、自分だけが場違いなところにいるようでとても不安でした。「うまくできなかつたらどうしよう」と、練習に行くたびに緊張していたのを覚えています。けれども、そんな私に先輩方や地域の方々の大人の方々は優しく声をかけてくれました。札の覚え方を教えてくれたり、取り方のコツを一つ一つ丁寧に教えてくれたりしました。負けて悔しくて泣いてしまったときも、「次は取れるよ」と笑顔で励ましてくれました。気づけ

ば、あれだけ不安だった場所は、安心できる場所へと変わっていました。

カルタの役員さんは道で会うと必ず声をかけてくれます。「久しぶり、元気か?」「勉強頑張ってるか?」と交わす言葉は短くても、その一言で私の心はいつも温かくなります。自分は「この地域で生きているんだ」「見守られているんだ」とはっきり感じられるのです。上毛カルタを通して、私は人と人とのつながりの大切さを学びました。最初は知らない人ばかりだった場所が、いつの間にか「自分の居場所」になっていたのです。

しかし、今その居場所が少しずつ変わり始めているように感じます。カルタの練習に来る人は減り、以前のようにぎやかさが少なくなってきました。それは、カルタだけではありません。近所で顔を合わせても挨拶を交わすことが減り、地域の行事に参加する人も少なくなってきました。人と人との関わりそのものが静かに、確実に弱くなっているように感じるのです。そんな中私はニュースである現実を知りました。「子供会の解散」です。その地域の子供達はもうカルタができなくなるのではないかととても心配になりました。調べてみると残念なことに子供会やPTAといった組織の解散が全国的に増えている事が分かりました。地域のつながりが薄れるという事は、人が人に関わらなくなるということです。

もし、あの時誰も声をかけてくれなかったら、私はカルタをやめていたと思います。そして、「ここにいていい」と思える場所にも出会えなかったはずです。つながりがなくなるということは誰かの居場所がなくなるということではないでしょうか。私はそこに強い危機感を覚えます。

けれども、この町のつながりがまだ残っていると感じる瞬間があります。かつて一緒に練習をしていた先輩たちが、大学生や社会人になっても、地元に戻ってくると練習に顔を出してくれるのです。久しぶりに会っても、すぐにあの頃に戻り、以前と変わらず札を取り合う。その姿を見たとき、私は強く思いました。この町には帰る場所があるのだと。

地域とのつながりは自然に続くものではありません。人がつなごうとしなければ続かないものだと思います。だからこそ私は将来どこで何をしようとも、この町とのつながりを持ち続けたい。そして、今度は私が誰かに声をかける存在になりたい。

上毛カルタは、人と人をつなぐ大切な文化です。一枚の札は小さなものかもしれませんが。けれども、その一枚が人と人をつなぎ、誰かの居場所を作ることがあります。あの日、何もできずに立ち尽くしていた私を支えてくれたのは、一枚の札の向こうにいた、人の温もりでした。今度は、私がそのぬくもりを、次の世代へと手渡していきたいです。

命 を 乗 せ て

太田市立太田中学校 3年 河村 優希

私の朝は忙しい。昨日の疲れも癒えないままに、グズグズと身体をたたき起こして、身支度、朝食、「いってきます」。思い通りにならない赤信号にやきもきしながら、今日も全速力で文明の利器、自転車を漕ぐ。そんな毎日の中で、何度か危ないシーンに出くわした

こともある。その一瞬はヒヤリと肝を冷やし、安全運転を心がけるものの、まさか自分が交通事故に遭うなんて夢にも思っていない。そう。私たちは皆、例外なく油断しているのだ。

「通学時における、中高生の自転車事故件数の割合が高い都道府県はどこか」と聞かれたら、みなさんはどこを思い浮かべますか？それは、残念ながら私の住む群馬県です。圧倒的な車社会や公共交通機関の少なさを背景に、1万人当たりの事故件数は群を抜いており、2位に大差をつけています。悪い意味で。

今年の4月、道路交通法の改正に伴って導入された、通称『青切符』。私たち中学生は、罰則の対象となっていませんが、自転車に乗る以上は正しい知識と理解、そして確かな運転技術が求められています。

『自転車は軽車両。』自転車は車の一種なのだから、その危険性を十分理解し、気を付けて乗りましょうという文脈でよく使われるこのフレーズ。あるとき私はふと疑問に思いました。車には教習所があって、免許を取るための試験があるのに、なぜ自転車にはそれがないのだろうと。そもそも私たちは、安全に自転車を乗りこなすだけの知識や技能を持ち合わせていると言えるのでしょうか。

実態が気になった私は、全校生徒約300人を対象に、自転車運転における意識調査を実施しました。その結果、安全に自転車に乗るための十分な技能を有し、ルールを理解していると回答した生徒は、3割ほどなのに対し、それらを学ぶ機会や場がもっと必要だと考えている生徒が8割以上もいるということが分かりました。『青切符』制度のような罰則による抑止力も重要です。しかし、本当に大切なことは、自転車に自分と他人の命を、未来を乗せているという自覚だと思うのです。そういった自覚を深める場が、今の世の中には、若者には必要なのではないのでしょうか。

そこで私が提案したいのが、『自転車教習所』の設置です。対象として想定しているのは、通学に自転車の利用を控えた小学生や中学生。私たちが、何となくできていて、何となく分かっているようなことを、きちんと学ぶ場をイメージしています。まずは、ヘルメットの正しい着け方や車両の安全確認から。顎ひもやサドルの高さを適切に調整できていない人も少なくないからです。少し面倒くさいかもしれませんが、多少の座学も必要です。基本的な交通ルール、代表的な道路標識の識別や通行帯の確認なども行うべきでしょう。もちろん、実技面も欠かせません。自動車教習所のコースに似た場所での実技講習を行います。私が行った意識調査では、約八割の生徒が、実際に事故に遭ったり、ヒヤリとした経験があると回答しています。そういった状況を予見したり、適切に対応できる力をつけたりするためには、シミュレーターやアプリを活用した実習も効果的かもしれません。

拙い考えやプランだとは自覚しています。でも、命を守るためにやれること、やるべきことはたくさんあると思いませんか。

私たちは、たった一つの命を乗せて生きる人間です。そして人類は、その命を輝かせるために、様々な道具を発明し、暮らしを豊かなものにしてきました。その一方で、使い方を誤ったがために、人を傷つけたり、健康を害したりしたものもたくさんあります。ナイ

フ、爆薬、スマホ、SNS…。有形無形に関わらず、様々な道具の恩恵にあずかる以上、私はそれらと正しく向き合いたい。自分や他の人の命や安全を守るために、みんなが豊かで幸せな人生を歩んでいくために、必要な知識や技能をきちんと習得したいと思っています。自転車も含めて。

中途半端な知識や技能で道具を使うことは、時に命に関わる事態を引き起こしかねません。最後に、日常的に自転車に乗り、今まで大きな事故に遭ったことのない皆さんに問いかけます。あなたがこれまで無事だったのは、十分な知識や技能を有していたからですか。それとも、単なる偶然の積み重ねですか。